

## 自己疎外の精神病態生理学的考察

別 府 穂 積

日本医科大学第一生理学教室

上 田 五 雨

信州大学医学部順応医学研究施設

## Psychopathophysiological Studies on "Self-alienation"

Hozumi BEPPU

Department of Physiology, Nippon Medical School

Gou UEDA

Institute of Adaptation Medicine, Shinshu University

## 緒 論

現代は「疎外」の時代である。「疎外は現代人のモード」であり、猫も杓子も口を開けば「疎外」という。それでいて、本当の意味を知る人は少ない。『近代人の疎外』の著者パッペンハイム<sup>1)</sup>は「どうしたら、我々は疎外の力を減らすことができるのだろうか。どうしたら自分自身から疎外され、他の人たちからも疎外されている人間が自分の正体をとりもどし、自分と、自分の仲間である人間とを隔てている溝を埋めることができるのだろうか」という質問を多くの読者から受けたと語っている。このような不透明な問題の意味に接近することが、今回の目的である。

## 本 論

## 1) 疎外の意味

クルト・シュナイダーは「精神病患者の症状に対する多くの漠然たる術語(Fachausdrücke)を解明し、それらを区別し、より明瞭なものとするのが……精神病理学の課題である<sup>2)</sup>と述べたが、「疎外」の意味もまた、解明し、区別し、確実にされねばならない。「疎外」という言葉はもともと精神病理学の言葉であるから。「疎外」といふ言葉の古い意味は、狂った人という意味である。フランス語の aliéné, スペイン語の alienado は、共に精神病患者、即ち徹底的に、完全に疎外された人間、を意味する最も古い言葉なのである。いまでも英語で「alienist」といえば、精神病患者を治療する医者を表わすのに使われている<sup>3)</sup>。そして、その本来の意味は、「正常の心理からの逸脱」や「正常性の喪失」であり、フロムの表現によれば、完全に疎外された人間(absolutely alienated person)を意味する。それ故、「狂気の人間は、完全に疎外された人間であり、つまり彼自身の経験の中心である自

分を、完全に失ってしまっているのであり、自我の感覚を失ってしまっている<sup>4)</sup>のだとフロムは附記している。つまり、狂人を完全に疎外された人間なのである。精神病理学では離人症(Depersonalisation)とも名付けられているが、疎外も離人症も内容的には同じことである。ヴェルニッケ<sup>5)</sup>は体験を外界精神(Allopsyche)、自己精神(Autopsyche)、身体精神(Somatopsyche)に分け、外界精神の離人症(疎外)は実在感喪失(Derealisation)から知覚疎外(Entfremdung der Wahrnehmungswelt)まであるものと規定しているが、臨床的には、「何でもヴェール越しにみえるようで、人の声は遠く離れたところから聞えるみたいであり、身体が実在するかどうか確かめるために時々自分で自分を触ってみる<sup>6)</sup>」という患者の苦しみがそれに相当する。ヤスバースは「離人現象や知覚界の隔離も疎外であり、これらをもつものは精神衰弱者とよばれる<sup>7)</sup>と述べているが、知覚界と自己の現存在が「疎外」する状況下では、現実意識は失われるからである。これは、現存在の根元的な一体験にちががなく、ジャンネ<sup>8)</sup>によって実在機能と名付けられたものである。まず、「疎外」が精神病理学の固有な言葉であることは解るが、「疎外」に、本来の狂気ないし離人という精神病理学上の意味をつけて考える方が理解はしやすい。谷嶋は「疎外とは、現代人および現代社会に内在する幾多の病的症状群を総括するために用いられる一つの指標である<sup>9)</sup>と定義したが、「病的症状群」というような異常な体験を強調するのは、「狂気」とか「離人」のようなものをふまえて述べている誤である。ところがフロイト学派では、「疎外」を文化のメカニズムに対する個人の適応障害として、個人の解体(personality disorganization)の一つの特徴とする。また、フロイトの手法を用いたマル

ターゼ<sup>10)</sup>の『エロスと文明』のような深層心理学的解釈も出る。かくして、「正常の心理状態からの逸脱」や「正常性の喪失」という意味から、「正気の社会」をまず前提して、それからの偏差を考える価値概念に解釈が変っていくことになる。丁度、務台らも全体的人間という一つの理想的人間を画いて、そこからの偏差を「疎外」として規定している。現在、英語の alienation, 仏語の aliénation は、「譲り渡す」というくらいの言葉で、法的には「譲与」、「割譲」の意味である。ところが Entfremdung という場合には、本来の「狂気」の意味に、哲学や思想の言葉としての「疎外」という意味がつけ加わったものと考えねばならず、単に「譲り渡す」くらいの日常語でないことはいうまでもない。ドイツ語の Entfremdung というのは、Wahrig の Deutsches Wörterbuch<sup>11)</sup>によると、eine Sache ihrem Zweck entfremden (目的にそむかせる)、又は「もくろんでいたことを別の目的のために使用する」と説明されていて、英語の意味とは異なる。von der Wahrheit entfremdet とは「真理に反した」ということであり、第2次世界大戦の際、ドイツの戦没兵士が恋人や新妻にあてた手紙のなかにも Entfremdung という文字はよくみられるが、けっして「譲り渡す」などという意味ではない。むしろそらざらしいという意味である。Entfremdung はドイツ古典哲学に既に用いられた概念なのである。マルクスは周知の如く、「疎外」を「人間自身の行為が彼にとって一つの高き対立的な力となり、そして、彼がこれを支配するのではなく、これが彼を抑圧する」(Die eigne Tat des Menschen ihm zu einer fremden, gegenüberstehenden Macht wird, die ihn unterjocht, statt daß er sie beherrschaft.)<sup>12)</sup>と規定しているが、英語の alienation (譲与・割譲)とドイツ語の Entfremdung (疎外)の意味を簡単に理解するには、例の有名なダヴィドフの寓話を想起すればよい<sup>13)</sup>。それは、自分が蛇を呑みこんで自分の胃袋を蛇に譲渡した一人の男の話であるが、後に、蛇は逆に絶対君主の如くその男に命令し、おびやかす、その男は、呑みこんだ蛇の恣意に臣下の如く平伏する奴隷状態になってしまったという寓話なのであり、蛇に支配されている個人は救いようのない孤立感・偶然感におそわれる。ところで、「疎外」と「自己疎外」の意味内容も明らかにしておく必要があろう。この点について、務台は、「外からの人間疎外は実は、中からの人間疎外を呼び起している……人間があまり外から疎外されると疎外の意味すら考えることができなくなってしまふ。貧しさはそのいちばんよい例で……つま

り人間疎外は人間の暗い自己疎外の形となって現われる」<sup>14)</sup>と述べている。要するに「疎外」も「自己疎外」も同じことなのだが、更に詳しく述べてみよう。パッペンハイムは疎外に三つのタイプを認めている。即ち「第一は人間の自己自身からの疎外である。近代の人間はしばしば自分自身であることに困難を感じている。我々は自分自身にとって、よそよそしい人間になってしまったと時折りいうことがある。それと同時に、我々はまた我々の仲間である人間からもよそよそしくなり「疎外」されている。そして最後に、我々の住んでいる世界から「疎外」されている。」という三つのタイプがあるが、本当は一つの「疎外」の過程の三つの異った面が示されているにすぎない<sup>15)</sup>。単に同じ過程の異った面を表わすにすぎないとすれば、「疎外の二つの形態をそれぞれ別々に処理することはできない」<sup>16)</sup>わけである。つまり「疎外」も「自己疎外」も単一の疎外過程である。疎外の類型については、ブラウナーらは、powerlessness, meaninglessness, social alienation, self-estrangement というような類型に分けているし<sup>17)</sup>、社会心理学者のシーマンは『疎外の意味について』という論文で疎外概念の5つの用語法をあげて分類している。つまり、1) powerlessness, 2) meaninglessness, 3) normlessness, 4) isolation, 5) selfestrangement である<sup>18)</sup>。またルフェーヴルは「宗教的疎外・哲学的疎外・経済的疎外・政治的疎外・法律的疎外・倫理的疎外」等に分けて「疎外概念」を講述している<sup>19)</sup>。

## 2) 外 化

次に「疎外」の意味をさらに明確にするため、一応「外化」について述べる。マルクスでさえ「疎外」と「外化」または「疎外」と「物化」を区別していないが、やはり区別して考えた方が理解しやすい。精神病理学でいう「幻覚」、「考想化声」(Gedankenlautwerden)を考えてみれば、「疎外」≡「外化」の意味が理解されよう。精神分裂病の幻覚のうちで、多いのは幻聴(Gehörshalluzination)と体感幻覚(abnorme Körperpersensation)だが、この幻覚体験を患者にこまかく問いただしてみると、時には「自分の考えていることが声になって現われる」(考想化声)、「書物を読んでいると頭の声にさきに読まれてしまう」等という訴えがある。「それは私の思っていることが聞えてくるんです。静かになるとその声は高くなります」(Das sind meine Gedanken, die ich höre. Die werden laut, wenn es still ist.)<sup>20)</sup>とも答える。自分の考えが、外から自分の頭に声になって聞えてくるのであるから、つまり「外化」であり、時にはその声自分が

対する指示、命令、脅迫の形になることもあるわけで、この場合には「外化」⇔「疎外」の意味をもつ。ところで、自我所属性（自我保有性・ヤスパースのいう「能動性」の意識）の意味の把握はなかなか難しいが、「自我の所属性（Meinhaftigkeit）は他人から侵害された場合にだけ、その障害が把握可能になる」<sup>21)</sup>のものであり、その自我の所属性の障害が、疎隔体験（Entfremdungserlebnis）と呼ばれる。感情疎外（Gefühlsentfremdung）とは、はたからみると、生き生きした感性の表現がみられるのに、当人は自分の心の中では何もかも生気を失い、空虚になってしまったと訴えるような状態であるが、シュナイダーによれば「感情疎外の場合には、感情たとえば子供に対する愛情——は明らかにもう存在していないか、ほとんど存在していないのである。……この現象は単なる感情欠如の「感情」とも呼ばれるが、それは感情欠如に対する感情（ein Gefühl für Gefühllosigkeit）である」<sup>22)</sup>と述べ、「感情疎外は感情欠如に対する感情」にすぎぬとしているが、かかる自我性（または自我所属性）の障害においては、自分の心的作用や状態が自分のものとして体験されずに、他人から支配され影響されるものとして体験される。そして、それは「それが他人または外力のせいにされる」<sup>23)</sup>のものであって、「心的感情が他からの作為として受けとられることもある」<sup>24)</sup>。シュナイダーは、「だれが私の魂に、かって感じていたような生気をかえしてくれるやら」<sup>25)</sup>と吐露したが、この疎外された感情が外化されて、「他からの作為」として感じられても当然であろう。つまり「疎外」は「外化」の意味をもつ。「かって感じていたような」生気は「外化」されているが故に「かえしてくれる」べきものとなったのである。フロムが「疎外とは人間が自分を例外者として経験する経験様式を意味する」<sup>26)</sup>と述べて、「人間が自分自身から遠ざかってしまったこと」<sup>27)</sup>と定義しているが、これはシュナイダーの『精神病理学』の感情疎外、つまり感情欠如の感情である。更に他の例をあげると、「科学・技術」にせよ、「官僚機構」にせよ、「マス・メディア」にせよ、みな我々が作りあげたものであり、単なる手段であった。即ち、「なにになにのために或るもの」(etwas, um zu)であり、道具的存在（Zuhandensein）であった。然るにそれ等が我々に「外化」して、我々に対立するものとなっている。リルケの次の詩をみれば「外化」（疎外）の意味が首肯されるだろう。

見よ機械を

それが回転し復讐するさまを

われを奮め弱むるさまを

われらよりも 力を求めんとするならば

機械よ ひたすらに静かに

回転し はた仕えよ

これは機械の支配下に入った時代に、人間性の優越を守ろうと意図した詩の一部である。ヤスパースは科学・技術について次のように述べている。「技術は科学的人間による自然支配の営み」<sup>28)</sup>であるが、「18世紀以降、技術の革命ならびに、全体としての人間生活に革命がおこり、その速度は今日に至るまで高められてきた」ものである。なお「カール・マルクスが最初に大きなスケールで認識した」<sup>29)</sup>ものだが、「自然支配が強力に推進されたので、かえって近代技術は人間自身を以前に予想もされなかった仕方でも今にも征服せんばかり」<sup>30)</sup>とし、「人間は自分で自分のものとして技術的に産出した第二の自然のなかで窒息」<sup>31)</sup>する運命となったのである。そして結局、人間は「故郷をもたぬ地上の住人となり、人間は伝統のつながりを喪失」<sup>32)</sup>し、「機械のなかの機能的分子」になり、非人格化されて、無思慮にひたすらに生きることだけのものとなる<sup>33)</sup>。つまり、我々自身を「疎外」するものとなる。そして産業労働については、ヤスパースは、「自己の活動と労働にみずから満足を見出だすこと、これが主体の無限の権利である」の標語（ヘーゲル）を引用して、「疎外」からの克服には労働が自分のものであること、その労働のなかに満足がなくてはならぬということを示唆している。このヤスパースの指示にもかかわらず、現代産業社会においては「人間そのものが、目的に適合するように加工されるべき原料の一つとなり、人間が手段となる」のである。この科学技術からの疎外は、「無思想、機構の中での空虚な機能、内面性を喪失した自働機械、娯楽への自己喪失、増大していく無自覚、過剰な神経亢奮」<sup>34)</sup>へと埋没するに至るものである。

### 3) 物 化

精神病理学では、特に「物化」という術語はない。精神分裂病は、むしろ、人間疎外の一つの表現形態であるが、分裂病の荒廃した極限状況は分裂病性痴呆（eine Form von Blödsinn）であり、ヤスパースは「知能の永続的欠損を（einen dauernden Defekt）痴呆と（als Demenz）」<sup>35)</sup>定義しているが、この場合には、人間が「植物的存在」に「化石」の如き状態に変わった形であり、疎外→非人間化→物化の如き変化が推測されよう。フロムは「神経症の人間とは「疎外」された人間である。……丁度、彼の仲間の人間が彼によって他人であると同じように、彼は、自分自身にとっても他人なのだ。彼は他人をも自分をも、本当にある

がままに経験するのではなくて、彼らのうちで働く無意識の力によってゆがめられたものとして経験する』<sup>36)</sup>と述べ、ノイローゼの人は「自分自身にとって他人なのだ」。ノイローゼは心因的なもので、自我がおびやかされている状態をいう。この場合、自我に与える負担を軽減し (Ich-Entlastung) あるいは病気によるエネルギーの消費をなるべく節約しようとして表わすのが神経症状である。神経症にみられる防衛機制とは、目的論的にいえば自己の保全・逃避・願望充足などの意味をもつ。シュナイダーは「神経症は神経の障害でなく、心的障害である」。『神経症は〈もつ〉のでなく、神経症者であるのである。神経症者が治りたいと思うなら、この事情を理解することだ』<sup>37)</sup>と述べているが、神経症は自己不信であるから、「事実とは自分自身を自分の力や豊かさの活動的な担い手として経験するのではなくて、その生き生きした本質を投射した、彼の外部の力に依存する貧しい〈物体〉だと自分を感ずる』<sup>38)</sup>のである。フロムは「疎外概念は旧約聖書の予言者たちが偶像崇拜と呼んだものに等しく』<sup>39)</sup>この偶像崇拜という意味をよく考えてみれば疎外の意味がよく理解されると述べている。この意味であらゆる服従的崇拜の行為は疎外と偶像崇拜の行為なのであって、人が非合理的な情熱に支配された時、それが他人との関係だけでなく、自分自身との関係であっても、偶像崇拜または疎外といえるのである。だから『キリスト教の本質』のなかで、フォイエルバッハは「宗教の秘密は人間学である。」(Das Geheimnis der Theologie ist die Anthropologie.)<sup>40)</sup>と述べ、実際人間は自分自身の本質を自分の中に見出す前に、まず自分の外に移すのだといい、「神学の批判こそ人間の此岸の現世諸関係 (diesseitigen, weltlichen Verhältniss des Menschen) に対する一切の批判の前提』<sup>41)</sup>だとする。かくて「神学は思弁的な宗教哲学によって、オントロジーとして取り扱われるのではなく、精神病理学として取り扱われるのだ』<sup>42)</sup>と断定する。つまりフォイエルバッハは宗教の人間疎外は「精神病理学の疎外」として取り扱われるべきだという。さて、偶像崇拜について考えてみよう。「偶像を崇拜する人間は、彼自身の手による作品に頭をさげている。つまり偶像は疎外された形で、彼自身の生命力を表わしている。』<sup>43)</sup>即ち、自己の精力・能力を傾注して作りあげたキリストの偶像 (人間的努力の結晶) に膝まずいているわけで、この疎外は偶像という「物体」に疎外されているのであるから、「物化」という意味がよく理解されるであろう。だからフロムは「偶像崇拜という意味をまず考えてみると「疎

外」の意味がもっとよく理解できる』<sup>44)</sup>と述べている。この「疎外」の内容はむしろ「物化」の意味である。また現代社会での貨幣は、人間相互の労働関係の「物化」であり、労働の社会的関係を対象として自分自身から疎外されたものなのである。現代産業社会においては、人間はいよいよ〈商品化〉され、人と人との関係は〈物と物〉との関係においてひき裂かれるのであり、これらの関係はいつも「物に結びつけられ、物として現われるのである。

#### 4) 抽象化

次に「抽象化」と解されるべき「疎外」について言及する。「疎外された人は、とても健康とはいわれない。こういう人は、自分が、自身や他人によってあやつられる物質であり、投資物だと感ずるので、自己意識というものをもちない。このように自分がないことは、深い不安をひきおこす。虚無の深淵に直面させられたために生ずる不安は地獄の拷問よりも恐ろしい』<sup>45)</sup>、「現代がまさに不安の時代と呼ばれるのにふさわしいとしたら、それはまず自己喪失から生じた不安のためである』<sup>46)</sup>とフロムは説明している。では、現代は何故「不安の時代」なのか。いかなる点で我々は「自己喪失」をさせられているのであるか。フロムは「客観的な行為に関連づけて外界を知覚できない人は狂気である。外界を写真のようにだけ経験できるが、内界つまり自分自身と接触していない人は疎外された人間である。精神分裂病と疎外とは補足的な関係にある。この二つの型の病気で、人間存在の一方の極が欠けている』<sup>47)</sup>と述べたが、「外界を写真のようにだけ経験」するとは、何を意味するか？ 疎外された人間の思考の特質は、彼らが自分の現実を、ただ当然のことと考えていることであり、現実の意味 (現在かくあるのは何故か) を尋ねようとしないうことである。言い換えると、現代産業社会における一つの要因は、「理性にとって破壊的なものであり』<sup>48)</sup>組織があまり大きくなると、誰も全体を見透すことができず、現象の根底にある法則が理解しにくい。別な表現をすると、「ある大きさの限度をこえると、必然的に具体性がなくなって抽象化がおこる』<sup>49)</sup>のである。いくつかの例をあげて説明すると、現代産業社会は「原子によって構成される。つまりたがいに異ってはいるが、利己的な利益やたがいに利用しあう必要のために結合された微分子によって構成』<sup>50)</sup>されているが、その仲間に対する現代人の関係は、「たがいに利用しあう二つの抽象の内容、二つの生命をもつ機械の関係である。雇用者は雇う人間を利用し、セールスマンはその顧客を利用する』<sup>51)</sup>という関係に要約されるのであり、自分自

身に対する関係は、「本来の性質から疎外され、社会体制のなかで、なんらかの機能を果す抽象物としてみずからを経験する」<sup>52)</sup>にすぎなくなっている。さらに「人間のパーソナリティーが労働市場における商品」であって、たとえば「彼の体、頭、そして魂はその資本であり、人生における彼の仕事は、それを有利に投資して自分自身から利益をうることである」<sup>53)</sup>つまり彼自身が目的に対する手段であり、必要があれば「お定り文句の挨拶」をし、「感謝の言葉をならべ」「微笑を売る」ことをあえてするわけであって、「取引のための仮面」を装おう。かくして売物にだされた疎外されたパーソナリティーは、実体としての自分自身を失う。このように仲間同志からも疎外され、自分自身からも疎外され、結局各個人は抽象的な存在、即ち「数字」として表現されるだけのものでしかない。「具体から抽象へ」というこの変化は「生産の分野における貸借対照表と経済事務の数量化を越えて発展」<sup>54)</sup>し、「人間は検査成績に表わされる数や量によって分類され、これを基として、色々な集団類型、等級に整理」<sup>55)</sup>されてしまうのであって、つまり人間はその数や成績から、判定され抽象化される。あるものは「大学生何名」「婦人何名」「有権者何名」という単なる数である。人間性は抽象されて、「個人を支配しているのは、自己自身への深刻な不満か、さもなれば、捨て鉢な自己忘却かのいずれかである。その結果個人は、機械の中の機能的分子となり、非人格化して無思慮にひたすら生きることだけに没頭し、過去と未来の展望を喪失して狭い現在へと萎縮し、自己に対し非誠実で、要求されるいかなる目的に対しても没個人的に役立つもの」<sup>56)</sup>となってしまう。「自分が自身や他人によって、あやつられる物質」であり、「自己意識をもたない」のであって、ひとりひとりの人間を指示するためには、単にアルファベットと数字さえありさえすればいいということになる。かくして人間の平均化、機械化、集団化はいよいよ不可避になり、人間の代替性とメカニズムへの隷従がいよいよ深刻化する。「虚無の深淵に直面させられたために生ずる不安」は、当然の結果として、現下の大学問題にみるような騒乱を惹起する。「学生人口の爆発的増加の結果、自分が名もない集団の一員になっているからだ」<sup>57)</sup>とロゲンドルフは説明しているが、それはまさに「現代高度産業社会における人間疎外への反抗」にほかならないのであり、大衆と化した、抽象化された学生集団の反抗の叫びというべきであり、「内的な現実との接触が失われ、思想が感情と分離する精神分裂病に似た狂気」<sup>58)</sup>であり、あるいは、「百万人の愚行 (folie á

millions)、現代のあらゆる集団の狂気」<sup>59)</sup>ともいうべきであろう。さらに「金銭は労働や努力を抽象的な形」<sup>60)</sup>で現わしているが、金銭は他のいかなるものとも交換できるものであり、現代ではすべての労働は金銭で酬われるし、経済関係の密接な組織は労働の抽象的表現たる金銭に、還元できる。そうになると、すべてのものが抽象化されて、人や物の具体的現実には抽象によって、幻影によって語られる。フロムが、「300万ドルの橋」とか「20セントの葉巻」とか、「5ドルの時計」というように<sup>61)</sup>、橋や葉巻や時計の具体性に関心をもつのでなく、その主要な性質は金銭の額で抽象化された形で述べられる。事実、それは現代人の社会的性格に固有な抽象化であり、疎外の病状なのである。「科学も商業も政治も人間らしいセンスをもつ基礎や調和をまったく失って、我々は数字や抽象化のなかに生きている。人間は自分で作りあげた力に追いつてられながら、狂気のなかで計画し、抽象することに追われつつ、ますます具体的な生活から遠ざかってゆく。

## 結 論

まず「疎外」の一般的意味が述べられ、ことに「疎外」が語源的に狂気という意味をもつことから始め、精神病態生理学的に注釈を加えながら、その「出所と正体」を把える試みが行なわれた。また「疎外」という言葉は「外化」「物化」「抽象化」等という意味にも転用されていて、これらの意味の解明が行なわれた。さらに、フロムが「現代人の仲間に対する関係は、たがいに利用しあう二つの抽象の内容・二つの生命をもつ機械の関係だ」といったが、これを「現代の教師と学生との関係は、たがいに利用しあう二つの抽象の内容・二つの生命をもつ機械の関係」といいかえるなら、現下の大学問題は、「疎外された社会のなかにおける疎外」の関係であるといえる。人間の生活は、その生活様式をただ繰り返すことによって過ごされていくものではない。人間は退屈し、不満を覚え、楽園を逐われたと感じる唯一の動物でもある。疎外の苦しみは、まさに孤立の感情であり、閉め出されているという感情でもある。もっと、我々は現実を凝視し、「疎外」の意味をよく考えてみるべき時ではないか。

## 文 献

- 1) パッペンハイム, F.: 疎外に対する闘争, -キューバ革命の展望から-, 思想, 11:124, 1961. 岩波書店, 東京.

- 2) Schneider, K. : Klinische Psychopathologie, (Achte ergänzte Auflage) S. 145, Georg Thieme Verlag, Stuttgart, 1967. S. 98. (2) と同じ)
- 21) *ibid.*, S. 125.
- 22) *ibid.*, S. 155.
- 3) Fromm, E. : The Sane Society, P. 121, Holt, Rinehart and Winston, 1955, New York, Chicago, San Francisco.
- 23) *ibid.*, S. 122.
- 24) *ibid.*, S. 156.
- 4) *ibid.*, P. 124.
- 25) *ibid.*, S. 156.
- 5) 笠松 章 : 臨床精神医学, P. 205-206, 1959, 中外医学社, 東京.
- 26) Fromm, E. : The Sane Society, P. 121. (3) と同じ)
- 27) *ibid.*, P. 121.
- 6) Jaspers, K. : Allgemeine Psychopathologie, (Achte Unveränderte Auflage), 1965, S. 53, Springer-Verlag, Berlin, Heidelberg und New York.
- 28) Jaspers, K. : Vom Ursprung und Ziel der Geschichte, S. 129, 1949, R. Piper Co. Verlag, München.
- 7) *ibid.*, S. 79.
- 29) *ibid.*, S. 129.
- 8) 井村恒郎・懸田克躬・島崎敏樹・村上仁 責任編集 : 異常心理学講座, 第10巻, 精神病理学 4, P. 367-422, 1965. みすず書房, 東京.
- 30) *ibid.*, S. 129.
- 31) *ibid.*, S. 129.
- 9) 谷嶋喬四郎 : 疎外の論理と心理, 実存主義, 10 : 4, 1967, 理想社, 東京.
- 32) *ibid.*, S. 129.
- 33) *ibid.*, S. 130.
- 10) 中村雄二郎編集 : 現代人の思想 1, 病める現代, P. 274-344, 1967, 平凡社, 東京.
- 34) *ibid.*, S. 152.
- 11) Wahrig, G. : Deutsches Wörterbuch, S. 1084, Bertelsmann Lexikon-Verlag, Reihand Mohn, Gütersloh, 1968.
- 35) Jaspers, K. : Allgemeine Psychopathologie. S. 183, 1965, Springer-Verlag, Berlin, Heidelberg und New York. (6) と同じ)
- 12) Marx, K., Engels, F. : Die Deutsche Ideologie, S. 29, Dietz Verlag, 1953, Berlin.
- 36) Fromm, E. : The Sane Society, P. 121. (3) と同じ)
- 13) Juri Nikolajewitsch Dawydow : Freiheit und Entfremdung, Taschenbuchreihe Unser Weltbild, Band 29, VEB Deutscher Verlag der Wissenschaften, 1964, Berlin.
- 37) Schneider, K. : Klinische Psychopathologie, S. 46. (2) と同じ)
- 14) 務合理作 : 現代のヒューマニズム, P. 134, 1961, 岩波新書, 東京.
- 38) Fromm, E. : The Sane Society, P. 121. (3) と同じ)
- 15) パッペンハイム, F. : 疎外と社会 (I), 思想, 2 : 48, 1964, 岩波書店, 東京.
- 39) *ibid.*, P. 121.
- 16) パッペンハイム, F. : 疎外に対する闘争, - キューバ革命の展望から -, 思想, 11 : 122, 1961. 岩波書店, 東京. (1) と同じ)
- 40) Feuerbach, L. : Vorläufige Thesen zur Reformation der Philosophie, Kritiken und Grundsätze, S. 169. Verlag Philipp Reclam jun., Leipzig, (1839-1846).
- 17) Blauner, R. : Alienation and Freedom, The Factory Worker and his Industry, P. 15, 1964. The University of Chicago Press, Chicago.
- 41) Löwith, K. : Gesammelte Abhandlungen--Zur Kritik der geschichtlichen Existenz, S. 41, 1960, W. Kohlhammer Verlag, Stuttgart.
- 18) 日高六郎 : 現代における自己疎外, 思想, 10 : 5, 1962. 岩波書店, 東京.
- 42) フォイエルバッハ, L., 船山信一邦訳 : キリスト教の本質, P. 18, 1937, 岩波文庫, 東京.
- 19) ルフェーヴル, H. : 疎外概念, 思想, 4 : 101, 1968, 岩波書店, 東京.
- 43) Fromm, E. : The Sane Society, P. 122. (3) と同じ)
- 44) *ibid.*, P. 121.
- 45) *ibid.*, P. 204.
- 20) Schneider, K. : Klinische Psychopathologie,
- 46) *ibid.*, P. 204.
- 47) *ibid.*, P. 207.
- 48) *ibid.*, P. 171.
- 49) *ibid.*, P. 171.
- 50) *ibid.*, P. 139.

- 51) *ibid.*, P. 139.
- 52) *ibid.*, P. 142.
- 53) *ibid.*, P. 142.
- 54) *ibid.*, P. 111.
- 55) Jaspers, K. : Vom Ursprung und Ziel der Geschichte, S. 145, 1945, R. Piper Co. Verlag, München.
- 56) *ibid.*, S. 130.
- 57) ロゲンドルフ, J. : どこが違う, 東西の騒乱学生, 自由, 7 : 89, 1969, 自由社, 東京.
- 58) Fromm, E. : Psychoanalyse und Religion, S. 9, 1966, Diana Verlag Konstanz, Zürich.
- 59) *ibid.*, S. 25.
- 60) Fromm, E. P. 131. (3) と同じ)
- 61) *ibid.*, P. 114.

(昭和44年12月15日 受付)